

さず絶えることなく、足がだるくなるほど通っておいでに

なるのでしうか」(竹取物語・伊勢物語・大和物語)日本

古典文学大系、岩波書店、二二八～九頁。「古今和歌集」日本

古典文学全集、小学館、一五六頁。「日本史辞典」東京創元社

〈在原業平〉参照)

在原業平は、平城天皇の孫、阿保親王の五男として、天

長二年(八二五)に生まれ、翌年の天長三年(八二六)に

在原姓を賜って臣籍に降っている。その概略の経歴は、次

のとおりである。

嘉祥二年(八四九)正月七日

无位在原朝臣業平従五位下(続日本後紀)……二十五歳

貞観四年(八六二)三月七日

従五位上(三代実録)……二十八歳

元慶四年(八八〇)五月廿八日

卒(三代実録)……五十六歳

すなわち、淳和天皇の第四皇子『基貞親王』が薨去され

た貞観十一年(八六九)に、在原業平は四十五歳だった。

そしてこの時、小町は二十九歳であつたろうと思われる。

もしかしたら先の歌は、貞観十一年以後あまり年を経な

い頃に作られた——在原業平の片思いの「恋歌」、および

小町の返歌だったのかも知れない。

なお、在原業平と小野小町とは、『伊勢物語』から想像

して、後世夫婦であつたかのようにも云われているが、定

かではないようである。(「小野小町」前田善子、三省堂、一

九四～一九八頁。「日本史辞典」東京創元社〈在原業平〉参照)

「美男と美女とを配したい」

そうした人情(願望)から、いわば自然に生じた素朴な

思いなのであろう。(「日本の歴史」③平安貴族、読売新聞社、

一三二頁参照)

*

ここに、

〈在原業平は、陽成天皇の元慶四年(八八〇)に卒した〉

ということが特筆される。

在原業平は、……後述するような《小町が最も輝いた

時》を知ることなく、没したように思われる。

深草少将(楊の端書)

深草少将が小野小町のもとに九十九夜通つたという悲恋

の伝説は、あまりにも有名である。

「百夜通つて下さい」

という小野小町のところへ、夜ごと夜ごと、四位の深草少

将は通ひつづけた。そして、牛車の櫓(牛車の牛をはすし

という。(小野小町追跡) 片桐洋一、笠間書院、二三八〜

三九頁参照)

②ただし一方、平安時代末期の歌人・歌学者である藤原清輔(一一〇四〜一二七七)の『奥義抄』に「百夜伝説」が記されており、——こうした型は古くから存在していたのだらう、ともいわれている。(小町伝説) 明川忠夫、現代創造社、四四頁参照)

『奥義抄』は、『歌論議』なるものを引いて説明しているのであるが、……それによると、『古今集』恋歌五、七六

一(よみ人しらず)の歌

暁の鳴の羽がき百羽がき
君が来ぬ夜は我ぞ数かく

は、実は、
(1)あかつきのしぎのはねがきもはがき
かきあつめてもなげくころかな

(2)あかつきのしぢのはしがきもよがき
きみがこぬよはわれぞかずかく

という二首の歌の上句と下句がつかってしまっ一首に

なっただと言ひ、続いて(2)の歌の「しぢのはしがき」に

関する一つの説話をあげている。

昔、あやにくなる女をよばる男ありけり。こころぞしあ

た時、轆の軛を支へ、また乗り降りの踏合として用いる具)に

印をつけて、その度数を記し、九十九夜まで通ひつめたが、

百夜目に深草少将は大雪のため倒れて、遂に死に、恋を果

たさなかつた、というのである。(謡曲「通小町」。「広辞苑」

《深草少将》〈楊の端書〉。「小町伝説」明川忠夫、現代創造社、

四四頁、一行(43) 第43回 桐(参照)

それでは、深草少将の百夜伝説は、いづころから伝えらるのか、

れたのだろうか。

Ⅰ一般には、謡曲「通小町」から、深草少将の話が伝えら

れたとされている。(小町伝説) 明川忠夫、現代創造社、四

四頁参照)

●とはいえ、世阿弥(室町初期の能役者・能作者)の

「申楽談儀」によれば、——この謡曲「通小町」は、もと

大和の唱導師が書き金春権守が演じた能をもとにして、

世阿弥(元清)の父である観阿弥(清次)が作ったものだ

という。

●だが、それにしても少々不審なことに、

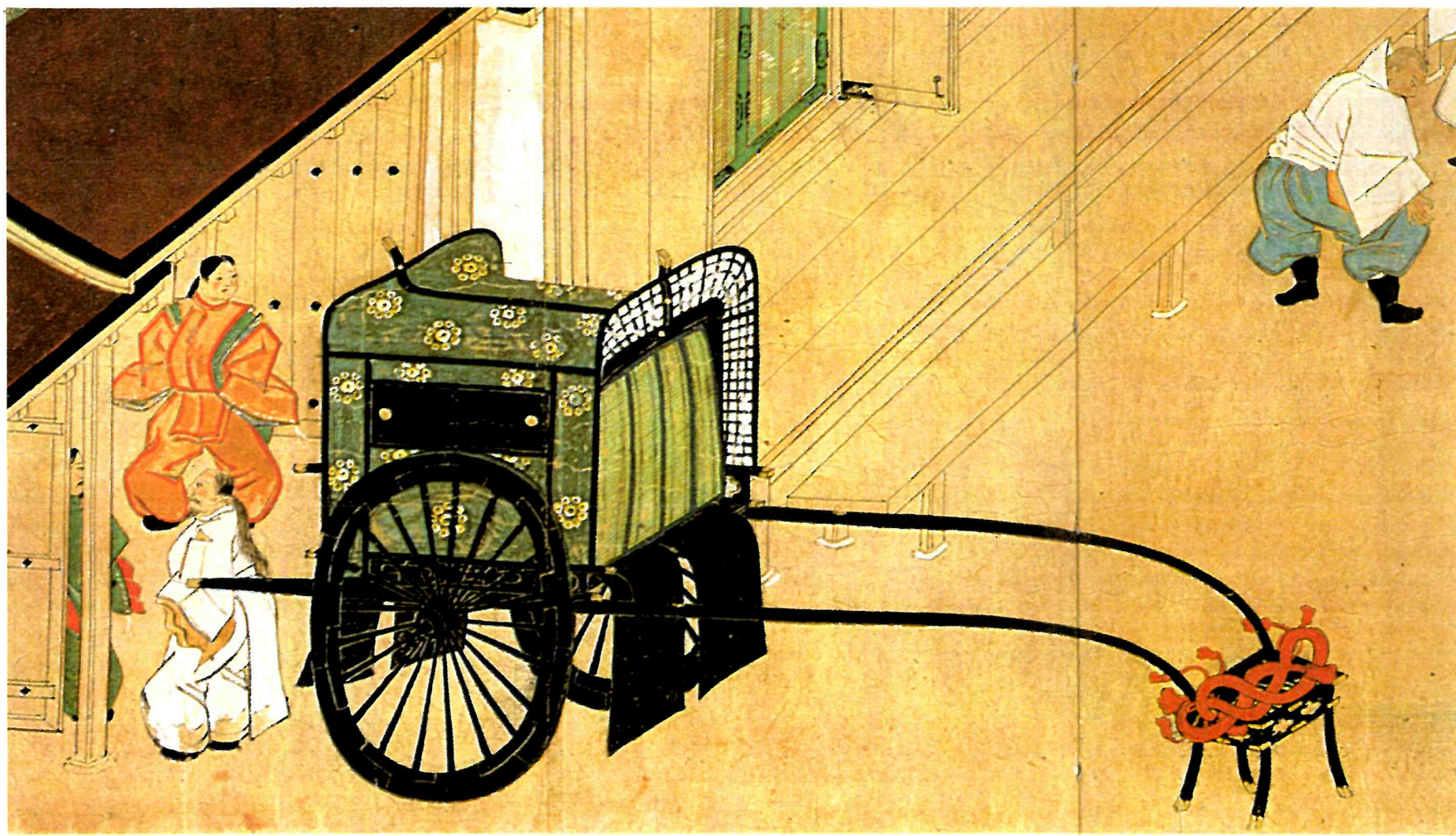
「謡曲「通小町」は、既にあった深草少将の小町への百夜

通い説話を前提として、いわば後日譚的に述べられている

と見なければ理解出来ない感じであるのに、……その原説

話は、『通小町』以前の文献にまったく見られない」

5,476^p



第543図 轆の軛を支えている楊なかにえ くびき さき いち

『石山寺縁起』日本絵巻大成(18) 中央公論社 1989年7月25日(4版)発行 卷四参照

・鷺足さきあし 黒漆塗りである

るよしをいひければ、女、こころみむとて、来つつ物言ひける所に榻を立てて、「これが上に、頻りて百夜臥し
たらむ時、言はむことは聞かむ」といひければ、男、雨風をしのぎて、暮るれば来つつ臥せりけり。榻の端に寝る夜の数をかきけるを見れば、九十九夜になりけり。「明日よりは何事もえ否びたまはじ」など言ひて帰りにけるに、親の俄かにうせにければ、その夜、え行かずなりにけるに、女のみてやりける歌なり。

という。

つまり、男は百夜目に来られなかつたが、——女は、その男の情に感じて、
「君が来ぬ夜は我ぞ数かく」と詠んだ、というのである。

もつとも、藤原清輔は、さらに続けて、

「これは、ある秘蔵の書に言へり」と侍れど、確かに見えた

ることなし」

と疑っている。

しかしながら、この当時、無視出来ないほど有力な説

となつたようである。「小野小町遺跡」片桐洋一、笠間書院、

一三九〜一四一頁参照）

*

5.477P

そして、以下に述べるような多種多様の見解がある。

■平安中期の長保二年（一〇〇〇）頃の作とされる『枕草子』二八六段の

「今宵のほども、少将にやなりはべらむとすらむ」

「今晚のうちにも、あの少将のようになつてしまつのでは

ないか、という気がいたします」

は、——疑点があるにしろ、深草少将のことを暗示してい

るのだらう、と言われている。「小町伝説」明川忠夫、現代

創造社、四四頁参照）

なお、『春曙抄』に、この言葉に関して、

「百夜かよ」といひし女のもとへ九十九夜ゆきて、今一夜

を待あへずしてうせたりし深草の少将の世がたりにてい

る詞にや。清少も早く参たき心いられに、今夜一夜を待か

ねてうせやし侍らんとするべし」

とある。「枕草子」(石田穰二訳注、角川文庫、一五四、二

四四、四〇〇頁参照)

●また因みに述べると、『枕草子』一六六段には、

「君達は、頭の中將。頭の弁。権の中將。四位の少将。蔵

人の弁。四位の侍従。蔵人の少納言。蔵人の兵衛佐」

とある。

清少納言は、当時かなり著名で、女達のあこがれの的

あった『君達』(諸王や撰家などの高貴な家の子息)を、……名で記さず、官位でもって羅列したのではなからうか。

この時代の人々は、恐らくそれだけで、誰のことを述べているのか理解したのであると推察される。

ここに、『四位の少将』と記されている。

あるいは、清少納言は、

〈小町のもとに九十九夜通いつめたという『四位の深草少将』

等こそ、君達のなかでも最も君達と呼ぶにふさわしい〉

と考えていたのかも知れない。

■『伊勢物語』は、ある男の歌(実は在原業平の歌)とし

秋の野に笹わけし朝の袖よりも

逢はでぬる夜ぞひちまさりける

を載せ、この歌に対する女の返歌(実は小野小町の歌)と

して、

みるめなきわが身をうたと知らねばや

離れなで海人の足たゆく来る

を載せている。(第九十五章〈在原業平〉の項において既述)

小町にこのような歌があるので、深草少将の百夜通いの

説話が生まれたのだらうか、ともいう。(古今和歌集「日

本古典文学全集、小学館、二五六頁参照)

■小野小町のもとに九十九夜通ったという悲恋の人物「深

草少将」は、僧正遍昭また大納言義平の子義宣を種とした

ものなのではなからうか、ともいわれている。(「広辞苑」

〈深草少将〉参照)

①「少将」から想像して、「良少将」と呼ばれた良岑宗貞

つまり後の僧正遍昭を「深草少将」とするのは、本居内遠

である。(「小野小町の考」。「小野小町追跡」片桐洋一、笠間

書院、一三七頁参照)

②『後松日記』の第十卷に、

「深草の少将、名は義宣、大納言義平の長子なり、弘仁三

年(八二二)三月十二日卒すの由、深草欣浄寺の説

とあるという。(「小野小町論」黒岩涙香、朝報社、四五頁参

照)

すなわち、嵯峨天皇の弘仁三年(八二二)に卒した義宣

は、「深草の少将」と呼ばれていたという。

■「深草」から連想して、「深草の帝」と呼ばれた仁明天

皇を「深草少将」とするのは、黒岩涙香である。(「小野小

町論」黒岩涙香、朝報社、五二―五六頁。「小野小町追跡」片

桐洋一、笠間書院、一三七頁参照)

なお、『深草』は、京都市伏見区北部の地名である。

(「広辞苑」〈深草〉参照)

5,478^P

また、往時の山城国紀伊郡深草郷に「深草陵」があって、この山陵が仁明天皇の御陵であるという。（「帝国地名辞典」

太田爲三郎、名著出版〈深草〉参照）

とはいえ、『通小町』の舞台となっている平安京北郊の「市原野」に、『深草』という地名は無い。（「小町伝説」明

川忠夫、現代創造社、四四頁参照）

ともあれ、このような数数の説があつて、まるで雲を掴むように判然としない。

そして、この伝説のもとになった『深草少将』という人物が、実在したのかさうでないのかさえ、全く詳らかでない。

いうまでもなく、立証する^{りよう}ことは甚だ困難ながら、この物語ではあえて、

〈四のみに『基貞親王』がお亡くなりになった貞観十一年

（八六九）秋九月二十一日以後のその当時——『四位の深草少将』と呼ばれた人物が実在したのであらう〉

と解してみたい。

■なるほど裏否のほどは分らない。

しかし、もしも小野小町が承和八年（八四一）に生まれたとすると、『仁明天皇』（＝深草帝）や『通昭』が、

『深草少将』であつた筈はあるまいと想到される。

『仁明天皇』（＝深草帝）は嘉祥三年（八五〇）三月二十一日に崩御され、『通昭』は同年同月の三月二十八日に出

家したのだった。

その時——小野小町は、わずか十歳であつたと思

われるからである。

■もしかしたら、『深草少将』とは、『深草帝の子

将』という意味なのではないだろうか。……『深草帝の子

少将』をすこし縮めて、『深草少将』と呼ぶことは充分あ

り得たように思われる。

参考迄に述べると、在原業平の次男滋春は、『在次の君』と呼ばれた。（「古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、五

〇〇頁参照）

そして、清原元輔が少納言であつたから、『枕草子』の

作者（本名不詳）は『清少納言』と呼ばれたのだった。（「広

辞苑」〈清少納言〉参照）

この当時、父を基点とした呼び名で称したり、父の名や

官職の一部をとりて通称としたりすることは、珍しくなかつ

たのであらう。

* ^{かんい}官位について

あらかじめ述べておきたことだが、それは

順位についてである。

①『日本書紀』(日本古典文学大系、岩波書店、六二頁、表十一の「冠位・位階制の変遷」には、——『品』(親王にたまわった位)と、『位階』との関係について、

「一品は正一位・従一位に相当し、二品は正二位・従二位に相当し、三品は正三位・従三位に相当する。そして四品は、正四位上・正四位下に相当する」

ということが示されている。

つまり、概略、一品は一位、二品は二位、三品は三位、

四品は四位に相当するといえよう。

②そして、『広辞苑』〈四品〉の項に、

「(四品は)四位の異称である」

と記されている。

③先にふれたが、——謡曲『通小町』には〈四位の少将〉

とあり、『枕草子』一六六段にも〈四位の少将〉とある。

『枕草子』(下巻)石田穰二訳注、角川文庫、五九頁注一

六、一九九頁補注九一には、「四位の少将」について、次

のように解説されている。

「少将の相当は正五位下で、五位の殿上人中、譜代の君達

から選ばれる。四位に進めばその職(少将としての職)を

辞するのが普通であるが、特別の恩賞の意味で原職に留ま

る場合がある。名譽なこととされていた

という。(同様の例「三位の中將」参照)

*

■それでは、『深草帝』(仁明天皇)の皇子達のうち、誰が「四位の深草少将」その人と考えて妥当だといえようか。

①先ず、仁明天皇の第一皇子『文德天皇』(八五〇年即位)

ではあるまいと考えられる。

②仁明天皇の第三皇子『時康親王』(後の光孝天皇)のこと

でもあるまい。

●『三代実録』貞観十一年九月十日条に、

「中務卿三品兼行大宰帥兼親王抗表」

●『三代実録』貞観十五年正月十三日条に、

「三品行中務卿諱天豐親王爲上野太守」

とある。

すなわち、時康親王は、四のみこ『基貞親王』が薨去さ

れた貞観十一年(八六九)九月二十一日當時すでに三品

(正三位・従三位相当)であった。

③仁明天皇の第四皇子『人康親王』のことでもあるまい。

先に述べたように、人康親王は、貞観元年(八五九)五

月七日出家入道されたという。

④仁明天皇の第七皇子『常康親王』は、嘉祥四年(八五二)

二月出家して雲林院にこもり、貞観十一年（八六九）五

月十四日に薨去されたという。（古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、五〇二頁〈雲林院の親王〉参照）

⑤仁明天皇の第十五皇子『貞登親王』は、貞観九年（八六

七）従五位下。寛平六年（八九四）正五位下であつたとい

い、この時まだ四位に至っていない。（古今和歌集」日本

古典文学全集、小学館、五〇四頁〈貞登〉参照）

■仁明天皇の多くの皇子の中から、『四位の深草少将』と

呼ばれた可能性のある親王を選び出すのは難かしいが、こ

こに仮りに、

《四位の深草少将》は、仁明天皇の第五皇子『本康親王』

のことである。》

と考えてみたい。（古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、

五一頁〈糸図〉。「国書人名辞典」岩波書店〈本康親王〉参照）

『三代実録』は、『本康親王』の官位について、大略次の

ように述べている。

●貞観二年二月十四日。……四品行上総太守本康親王、

爲^ス彈正伊^一。上総太守如^レ故。

●貞観五年二月十日。……四品彈正伊本康親王、爲^ス兵

部卿^一。

●貞観五年二月十四日。……四品兵部卿兼上総太守本康親

王。

●貞観十一年二月十六日。…四品守兵部卿本康親王、爲^ス

上総太守^一。兵部卿如^レ故。

●貞観十三年正月七日。……授^ク四品行兵部卿兼上総太

守本康親王^二三品^一。

●貞観十八年十二月二十六日。……二品行兵部卿本康親

王、爲^ス大宰帥^一。兵部卿如^レ故。

つまり、本康親王は、貞観年間前半の長い年月にわたつ

て、『四品』（四位相当）の位にあつたことが分かる。

*

本康親王（四位の深草少将）は、貞観十三年（八七一）

正月七日の任官の儀^{の儀}、爲^ス兵部卿^一、上総国を出立し

たことであつたろうか。

因みに述べると、——この当時、上総国（千葉県中央部

一帯の国）の『市原郡』（和名抄に伊知波良とある）に、国

府が置かれていた。千葉市の南約八キロ、東京湾に面した所

である。

そして、上総国市原郡内には、『市原』という村もある。

（帝国地名辞典」太田爲三郎、名著出版〈市原郡・市原〉。「和

名類聚抄卿名考證」池辺彌、吉川弘文館〈市原郡〉参照）

*

5484²上根

5481^P

基貞親王薨去
四かみと基貞親王薨去
貞観11年(869)

成 5474 下未

870 30
841 1
29 29

観十二年（八七〇）の九月末以前、都に到着し
上総国の市原野辺を後にした『四位の深草少将』は、貞
将は、絶世の美女を目にした。
その女人は、小野小町だった。
このとき小町は、あるいは三十歳であつたらうか。まさ
に艶やかで円熟したなまめかしさを漂わせていた。
少将は、一目見た小町のあまりの美しさに息をのみ、
——一瞬にして、その美貌のとりことなってしまった。
早速にもその夜、『深草帝の子少将』は、……高貴極ま
らない血筋の故に誰にも咎められることなく、宮中の小町
の居処へと牛車を進ませ、訪ねていった。
またまたお越しになった新たな殿方に、小町はたわむれ
にこう言った。
「百夜の間、一日も欠かすことなくお通いになつたならば、
私のかたくなな心も変わるかも知れませんね」
さあ、その言葉を真に受けた少将は、気もそぞろに夜毎
小町のもとへと通い続けた。

少将の相方は正五位下
5480
上未

140

けて、その度数を記し、九十九夜まで通いつめた。
いよいよ、次の日こそ、——はからずも任官の日、つま
り貞観十三年（八七一）正月七日だったのでなからうか。
その日は、朝から雪が舞っていた。
少将は嬉しくてならなかった。
「今夜は急いで行こう。姿は如何に、風折烏帽子に花摺衣
の色襲、裏紫の藤袴……ああ、わくわくする待ち遠しさよ」
（謡曲「通小町」より一部抜粋）
しかし、その日、朝廷を早く退出することが出来なかっ

た。
『三代実録』貞観十三年正月七日条に、こう記されている。
「(清和)天皇御^み紫宸殿^{むらさきみくら}。覧^み青馬^{あおうま}。賜^{たまは}宴^{うまひ}群臣^{ぐんしん}。
内教坊奏^{ないけうぼうそう}女楽^{にょがく}。宴^{うまひ}了^{しまひ}。賜^{たまは}祿^{ろく}各有^{おのづから}差^さ。
授^{さづ}四品行兵部卿兼上総太守本康親王^{しよへんしん}三品^{さんひん}。无品惟
恒親王四品。参議徒四位上行大宰大貳藤原朝臣冬緒正四位
下」

とある。
任官の儀式は短時間のうちに終つたにせよ、女楽が奏
されるなど、かなり盛大な宴が設けられたのであろう。
少将は、牛車の櫓^り（牛車の牛をはずした時、轆^{ろく}の軛^くを支え、
また乗り降り^{のりおり}の踏み台として用いる黒漆塗りの具）に印をつ

また乗り降り^{のりおり}の踏み台として用いる黒漆塗りの具）に印をつ
照）
H25(2013) 11.29
5,482 P

大宮人らの華やいだ宴は、いつ果てるとも知れず打ち続

いていったように想像される。

*

日が暮れて、賑やかな『飲酒』の席は、いよいよ酣とな

た。(謡曲「通小町」参照)

「何を浮かぬ顔をしておるのだ。そなたにとって、今日は何よりの目出度い日ではないか。ささ、この酒をば飲み干

すがよい」

こうして後、やっと『飲酒』の宴饗から解放された時、
深草少将の足はすでにおぼつかなくなっていた。物み

な全てが、フワフワと動いているように見えた。

「急いで行かなければ、……」

小町が居処としているところは宮城内にあって、それほど遠くに離れてはいなかったらうと思われる。

「えい、えい、牛車を呼ぶのもどかしい。……うむ、歩い

て行こうぞ」

三品となった本康親王(以下、これまで通りに少将と呼ぶことにしたい)は、……いま、大雪の中を、必死になって

歩いていた。

しかし、心がおせるほどには、少将の足は前に進まなかつ

た。

「ああ目がまわる」

いよいよ激しい酔いがまわってきた少将は、もはや歩きつづけることも出来ず、雪の中に倒れ伏した。

少将は、哀れ、恋を果たせなかった。

三品本康親王は、うしろ髪引かれる思いで、——上総国の『市原野辺』へと帰っていったのだらう。

■もともと、『三代実録』の貞観十三年正月七日条に、「雪」が降ったという記事は無い。

また、謡曲『通小町』に、この日、大雪が降ったと記されているわけでもない。

ただし、謡曲『通小町』には、百夜目の少将の様子について、

「急ぎて行かん。姿は如何に。笠も見苦し、風折烏帽子。蓑をも脱ぎ捨て、花摺衣の、色襲。裏紫の、藤袴。云々」

とある。

すなわち、

〈少将は、笠や蓑を脱ぎ捨てて、小町のもとへ急いだ〉

という。

雪が降っていたと解釈しても、おかしくないように思われる。

なお、蛇足ながら、

「笠や簀を身につけた姿では見苦しいので、これらを脱ぎ

捨てて小町の居処へ急いだ」
—雨が降っていたとは考えにくい。

■さらに述べて、謡曲『通小町』の末尾近くに、

「飲酒は如何に。月の盃なりとても、戒めなれば保たんと、

唯一念の悟りにて、云々」

とある。

上弦の月(半月)である『七日の月』のことを、……

『書雲に隠れていて見えなかったであろうが、あえて詩的に、

『月の盃』と称したのではなからつか、などと想像される。

因みに述べて、

①『上弦の月』について、

「新月から満月に至る間の半月。日没時に南中し、真夜中
に弦(平らな部分)を上にして月の入となる。太陰暦で毎
月七日・八日頃に当る」

と説示されている。(『広辞苑』〈上弦〉。「天体・気象」原色

学習ノイド図鑑、学研、三五頁参照)

②また、『月の盃』について、

「月を盃に見たてていう語である」

という。(『広辞苑』〈月の盃〉参照)

〈深草少将は、百夜目の貞観十三年(八七一)正月七日に、

『飲酒』によって恋を果たすことが出来なかった

と解しても、あながち不自然ではないように思われる。

*

先述のように、「百夜通ひ」の真相は分からないが、

——謡曲『通小町』は、ともあれそういった伝説を背景と

して作られたのであろう。

古曲を観阿弥清次が改作し、そのうち世阿弥元清が更に

改作したものである。

では、謡曲『通小町』の概略の構想について述べておく

ことにしよう。

深草少将の愛欲は熱烈を極めた。

しかし、深草少将は、才色を自負する小町に弄ばれ、世

にも気の毒な死に方をした。小町のもとに九十九夜通ひ、

その後、小町も死んだ。

ところが少将は、小町を平安京北郊の『市原野辺』に留

めて、小町を成仏させようとしな。

さて、市原近傍(市原の東約五キロ)の八瀬の山里で一夏

を送っている僧のもとへ、小町は里女の姿で毎日木の実や

薪を持って来る。回向を受けて成仏したいからである。

僧が女の素性を問うと、女は、

5481 F444

5484 P

5860

(二)

同文 5861⁸

はうがしや小野と
市原野に
おの

恥かしや己が名を小野とは言はじ
薄生ひたる市原野に住む姥ぞ
と答え、回向を乞うて消え失せた。

この女を小町の幽霊と察した僧が、市原野辺に行つて回向をしていると、女が再び現われて授戒を乞うた。

するとそこへ、ふいに一人の男が現われ、こう言った。
「いや叶ふまじ、戒授け給はうらみ申すべし。はや帰り給へお僧」

そして男は更に、
「二人居るのも悲しいのに、私を唯一人取り残して成仏しようというのか」

と言ひ、女を引き留めた。
その男女が少将と小町の亡霊であることを知つた僧は、

二人共に成仏させようとして、
「懺悔の爲に百夜通ひの有様を示されよ」と言つた。

この勧めに従つて、少将の亡霊はその時の事を物語つた。
さらに、小町が論じた飲酒の戒めを悟つたことが一念発起の基となつて、兩人共に成仏したといふのである。(謡曲「通小町」観世左近、檜書店〈解説〉参照)

5861⁸
124

5,485⁸

なお、謡曲『通小町』には、最高に盛り上がるべき「百夜通ひ」の百夜目の情景、および小町と少将の成仏について、――次のように記されている。

かやうに心を盡し盡して榻の数々よみて見たれば、九十九夜なり。今は一夜よ、嬉しやとて、待つ日になりぬ。急ぎて行かん。姿は如何に。笠も見苦し、風折烏帽子。簀も脱ぎ捨て、花摺衣の、色襲。裏紫の、藤袴。待つらんものを。あら忙がしや。すは、はや今日もくれなるの狩衣の、衣紋(えりもと)けだかく引きつくるひ。飲酒は如何に。月の盃なりとても、戒めならば保たんと、唯一念の悟りにて、多くの罪を滅して、小野の小町も少将も、共に佛道成りにけり。共に佛道成りにけり。

とある。
まるで幽霊の足のようになうやむやで、何だかよく分からないうべきなのかも知れない。
いや、酒に酔い潰れたかのように朦朧としている、とい

そこで、
「最後に小町と共に少将も佛道成就するといふ結末は、不自然であるけれども、能の舞台操作の常套手法と見ればあまり多く論ずるにも及ぶまい」

「現代の我々には、到底納得し難い結着のしかたである」といえよう。

①どんなわけがあって、深草少将の亡霊むせうれいが、小町の亡霊を
平安京北郊ほつこうの『市原野辺いちばらのへ』に引き留とどめていた、というのだ
ろっか。

②また、一体^{いったい}どうして、深草少将^{ふくそうしょうしょう}や小町の亡霊^{むとうりやう}が平安京^{へいあんきやう}北郊^{きたきやう}の『市原野辺』^{いちばのへ}に居た^{ゐた}という舞台設定^{ぶたいせいてい}に、当時^{たうじ}の人々が納得^{なつとく}していたのだろうか、

だが、こうした
けば非常に煩雑^{はんざつ}になる。

『四位の深草少将』の一途な恋さえずり実らなかった。

類徒本「小町集」
海人のすむ里のしるべにあらずに

美しさに眩惑された数多の男達が、次から次へ言い寄っ
たが、……小町の心を動かすことは、どうしても、誰にも
出来なかった。

すごすごと引きさがつた男達は、皆が皆、小町が悪いわけでもないのに、なぜかしら小町を恨みにのみ思った、という状況が歌われているのである。

206

(15/1)

「小説」か左は「黒岩涙可」
重工
かき書いてる
皇47
前田

穴かき
し

令和元(2019)11/12(火)~11/16(木)
1/16 1/14 1/16

ふは
無様

5.487P

「小野小町」田
かたは 265P
5619P上5P

黒岩涙香24P

大正二年七月二十日再版発行、二四頁参照

まさしく、
負け犬の遠吠

といったところである。

己の無様さを腹立たしく思うと同時に、
未練がましく何かと云わずにおれ
なかつたに違いない。

自尊心(貴公子としての誇り)を傷つけた
れた男等にとつて「――よほど口惜しかった
のだらう。」

と。いう。(「小野小町論」黒岩涙香「朝報社」

生殖機能の事であろうが、男につけなかつた
ため、色々悪口を云われたと見える。云

かつたなど書いてある。ホトとは、多分
「或る著書などには、小町に「ホトが無
着違が―――跡を絶たなかつたらしい」
「悔し紛れに」小野小町を悪く様にする

(*)

また、いつのことだったのか定かでないが、こんな話が
伝えられている。「古今集」卷十一・恋歌（一五五六〜七）
下つ出雲寺（加茂川に近い上つ出雲寺の南にあった寺）で

故人の法事が営まれた日に、導師（法事の首座となる僧）
であった真静法師が話してくれた経文の語句の一節をとっ

て、安倍清行朝臣（八二五〜九〇〇）は恋歌を詠み、小
町のもとに贈った。

包めども袖にたまらぬ白玉は

人を見ぬめの涙なりけり

返し

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす

我はせきあへずたぎつ瀬なれば

「いくら包み隠そうとしても私の白玉は袖からこぼれてし

まいます。考えてみたら、これはお経にいう玉と違い、人

に逢えないときに目から流れ出る涙だったのです」

清行は、「人を見ぬめ」を表面は故人に逢えない意味に

とれるようにし、裏面で小町に逢えない意をきかせて贈っ

たのだった。

小町の返事や如何に、……と待つほどに、やがて、

片桐（片桐）

「あなたのはとおりにっんの涙だから袖で玉となってい
るのです。私の涙はこのとおりに逆巻いて滝つ瀬（急流）の
ように流れているので、せき止められるものではありません
ん。しかしそれにしても、厳肅な追善供養の席でこんな不
謹慎な歌を詠むとは、何とおろかなこと（でしよ）」

という辛辣な返歌が届いた。

愛する小野貞樹が悲運の死を遂げ、さらにまたかけがえ

もなくいとしい四のみこまでがこの世を去ってしまった、

……小町の沈んだ心は、幾年もの長い間、立ち直れなかつ

たに達しない。

特にこのような法事の席では、——心優しかった今は亡

き人の面影など思い起こされて、溢れる涙はせきあへず

（押さえようとしてもこらえきれず）、とうとうと流れ落ちて

いったのである。

そんな悲しい思いでいるときに、清行から恋歌が届いた

のだった。

たしかに清行の歌は、一見、故人を偲んでいるようにも

みえはする。

しかし、その歌を受け取った小町は、歌の裏に、恋心が

隠されていることを見抜いたのである。（恋歌として収められて

ここに小町は、清行を幾分かなりともたしなめ、叱責する意図をもって、「おろかなる」という返歌をしたためた

ように推察される。

●尚、心の内の恋人であった四のまこが亡くなった直後の頃であれば、『悲嘆のおまり』このような歌を作って返答することとはなかったと思われる。

四のまこがお亡くなりになって一・二年の後、もしくはそれ以後の作であろうと想像される。

●あるいはもしかしたら、——四のまこの為の法事だったのかも知れない。

「小町の孫」と「宮内省管轄下の小町塚」について

これから以降、とても信じ難い話の数々を書き綴ってゆくことになるが、……その前に、予め述べておきたい一点がある。

①『後撰和歌集』は、「小野小町の孫」の歌を載せている。②京都府綴喜郡井手町（奈良線玉水下車、徒歩二分）にある

「小町塚」は、宮内省の管轄下に置かれている。（小町伝説）明川忠夫、現代創造社、五六、九九頁参照

といふ二つのことである。

5,489^P

①橋本直香の『歌仙部類抄』女房部には、「孫あれば子あり、子あれば夫ありて、云々」と記されている。

小野小町は、いったい誰との間に子をもうけたのだからか。

②また、「小町塚」が宮内省の管轄下に置かれているということは、ただこととならない重要な事情を示唆しているように見える。

「小野小町は、たぐい稀な絶世の美女で、しかもひときわ擁でた歌才があつて、四のまこを慕う歌を始めとする数多くの香り高い名歌を詠んだ」とはいえ、いわばただそれだけの理由により、……小町の墓「小町塚」が宮内省の管轄下におかれた、などとは首肯しにくい。

以下、こうしたことを念頭において、この物語を書き進めてゆきたい。

『雨乞の和歌』について

まずここに、少々早すぎるけれども、『雨乞の和歌』について簡単に述べておこう。

神代紀上第六段一書第三には、

「日神、素戔鳴尊と、天安河を隔てて、相對ひて乃ち立ちて誓約ひて曰はく、云々」

とある。

●この物語では、

＜その昔、肥後国合志の広大な台地に築かれた壮麗極まりない都城の西北隅の『横山』の東南麓に、川幅の狭い『天安河』(川を隔てた対岸で喋る言葉が明瞭に聞えるほどの小川。いま「小野川」という)の流れがあつたのだらう＞

と述べた。(第三十六章＜天安河をはさんでの戦い＞の項にお

いて既述)

●そして、

＜小町は、仁明天皇の承和八年(八四一)の春に、古京の西北の隅(今の横山南麓「小野の里」で生まれたのだらう＞

と縷縷述べてきた。

*

さて、それがいつだったのかよく分らないが、…とある年の夏、勅命が降って、小野小町が『雨乞の和歌』を詠むことになった。

『雨乞』という儀式は、往古においては、極めて重大な国儀とされていた。

その大切な国務が、小町に命ぜられたのだった。

勿論、雨乞の爲に、立派な祭壇が設けられたに違いない。その祭壇の前で、小町は、優雅ながらも神妙に、時に激しく神に祈り、――そして厳かに、『雨乞の和歌』を詠ん

だことであつたらうか。

群書類従本『小町集』に、こう記されている。

日の照り侍けるに雨乞の和歌よむべき宣言ありて
千早振る神も見まさば立騒ぎ
天の戸川の樋口あけ給へ

なんととも莊重な歌である。即ち小町は、

〔千早振る神よ。じつとしていないで、立ち騒いで神鳴り(雷)を起こし、『天の安川』の樋(水門)の口を開いて、直ちに雨を降らせ給へ〕

と歌ったのだった。

なお、勅命によつて小町が『雨乞の和歌』を歌いあげたというのだから、…必ずや小町の声は、澄みきっていてよく通り、しかも聞く者がうっとりするほどのころよい調子を持つていたのであろう、と想像される。

また、小町は、

ことわりや日の本ならば照りもせめ
さりとては又あめが下とは

という雨乞の歌もつくつたと俗説に伝えられている。(「小

先に841年(天長) 54927上 941

野小町論 黒岩涙香 朝報社、一六八頁、二二二頁(参照)

だが何故、小野小町が雨乞の歌を詠んで、「雨を降らせ給へ」と神に祈願することになったのだろうか。

それは全くの想像でしかないが、前記述のように、

小町は、神官の家に生まれ育ち、幼少の頃からすでに

神に祈ることが身についていたかも知れない。(第九

十五章「小町の誕生」の項において既述)

恐らく時の朝廷は、

「小町が、歌を実にたくみに詠むばかりでなく、神に仕え

る作法をも身につけている」

はいふことを知りた……《名指》して、小町に『雨乞の

和歌』を詠むように命じたものと推察される。

*
それでは、小野小町に、

「雨乞の和歌よむべし」

という宣旨が降ったのは、一体、どの天皇の御世のことであつたろうか。

いうまでもなく推論の域を出ないが、以下のように想到

される。

■小町が、承和八年(八四一)に生まれたとすると、仁明朝

朝や文徳朝のことではあるまいと思われる。

5491^p

文徳朝末年の天安二年(八五八)に小町は十八歳だったこととなり、——国家の重大事「雨乞の儀式」において神に祈りを捧げ、『雨乞の和歌』を詠むには、まだ幾分若すぎる感がある。

■『宣旨』とは、天皇の命を伝える公文書のことである。

(「広辞苑」〈宣旨〉参照)

そこで、ここに、

《天皇御自身が、小町に『雨乞の和歌』を歌わせたいと望まれたのであろう》

と解してみたい。

とすれば、

①清和天皇(文徳天皇の第四皇子。八五八年に九歳で即位。在位八五八〜八七六年。陽成天皇に譲位。八八〇年に三十一歳で薨去)

②陽成天皇(清和天皇の第一皇子。在位八七六〜八八四年)

③光孝天皇(仁明天皇の第三皇子、時康親王。学問を修め、八八四年に奇行のみられた陽成天皇が廃されたのち、即位され

た。在位八八四〜八八七年)

④宇多天皇(光孝天皇の第七皇子。在位八八七〜八九七年)

と続く諸天皇のうち、……《どの天皇が小町に和歌を歌わせたいと切望された》と考えられようか。

5493頁 210
小町に宣旨をおく(1)にちよ

光孝天皇が、和歌興隆の端緒を開かれたのだった。『新古今和歌集』日本古典文学全集、小学館、562頁 ↑ 同歌 567頁

六〇七頁(光孝天皇)参照

・ 詳らかでないといえ、『光孝天皇』こそ、小町の和歌に興味を持っておられたように拝察される。

・ 九世紀後半のこの時代は、平安朝初期の漢詩文隆盛の時を経て、我が国独自の和歌を望む気運が一挙に高まっていた時期に当る。(『古今和歌集』日本古典文学全集、小学館)

七〇八頁参照

■ 先にも述べたように、『古今集』卷四一・四八には、こう記されている。

仁和帝(光孝天皇)、親王におはしましける時、布留の滝御覽ぜむとおはしましける道に、遍照が母の家に宿り給へりける時に、庭を秋の野につくりて、御物語(昔

の思ひ出話)のついでよみて奉りける。

僧正遍照

里はあれて人はふりにし宿なれや
庭もまがきも秋の野なる

時康親王が和歌に関心を持っておられることを知っているからこそ、遍照は母の家の庭を秋の風情が漂うように作り、そして和歌を詠んでおもてなしたのであるう、と思

われる。〔第九十五章<時康親王(後の光孝天皇)と、良岑宗貞(後の僧正遍照)との深い絆>の項において既述)

■ 『小倉百人一首』および『古今集』卷一一一には、

照)

天長八年(八三二)生まれの光孝天皇は、この時五十五

昭和に七十の賀をなさった時、
仁和元年(八八五)十二月十八日、光孝天皇は、僧正遍照に七十七の賀をなさった時、

「今夜はかようなめでたい宴を張ってともに楽しんでいますが、私はどうかして今後もしも生きながらえ、そなたの限りな

い八千代の長寿にもめぐりあいたいものだ」とお歌いになった。(『三代実録』仁和元年十二月十八日条参

照)

一五頁参照

■ 『古今集』卷七・三四七には、こう記されている。

仁和(光孝天皇)の御時、僧正遍照に七十(古希)の賀たまひける時の御歌

かくしつとにもかくにもながらて
君が八千代にあふよしもがな

仁和元年(八八五)十二月十八日、光孝天皇は、僧正遍照に七十の賀をなさった時、

「今夜はかようなめでたい宴を張ってともに楽しんでいますが、私はどうかして今後もしも生きながらえ、そなたの限りな

い八千代の長寿にもめぐりあいたいものだ」とお歌いになった。(『三代実録』仁和元年十二月十八日条参

照)

遍照 816a 890年
54617

890年
816 1
744

567
562

567
562

歳であった。君臣和楽の気分のにじみ出ている歌である。

「古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、一六九頁参照

このような『和歌』や『詞書』のはしから、

「光孝天皇は、和歌に多大の関心を持っておられた」

ということが分かる。

遍昭をはじめとする多くの者達から、

「小野小町が、和歌を非常にたくみに作る」

という噂をお聞きになった光孝天皇は、是非にも小町に

『雨乞の和歌』を詠ませたいとお考えになり、——名指し

て、小町に宣旨をお降しになったのであるう、と想察され

る。

光孝天皇と藤原氏との微妙な関係

それにしても仁明天皇の第三皇子時康親王（光孝天皇）

は、いったいどうしたわけで、天皇の位につかれたのだから

うか。

この当時の状況を、ごくかいつまんで述べておくことに

しよう。

藤原氏は、良房の代までは皇室と結びつく為に多々力を

尽くしてきたが、養子の基経の代になると、いまままでほど

皇室の親類であることに執着する様子はみられなくなって

5493 P

孝天皇は、自分の第七男である源定省、年二十一を立

ところが三年後の仁和三年（八八七）八月二十六日、光

③平安貴族、読売新聞社、七四〇五頁参照

を皇太子にたてることが出来るからである。（日本の歴史）

みな臣籍にお降しになった。こうすれば、基経の孫の皇子

らきにむくいるためか、自分の皇子たちに源姓を与えて、

天皇の位についた時康親王（光孝天皇）は、基経のはた

五十四歳になる時康親王だった。

だがここに、基経が選んだのは、仁明天皇の第三皇子で

き、宮中はわき返った。

基経に招集された公卿達がこの問題について論議したと

それでは、次の天皇はだれか。

あつに仕向けたようである。

め天皇をやめたいという詔を出された。基経が、その

翌年の元慶八年（八八四）二月、陽成天皇は、病気のた

ので遠慮したのであるう。

からないと書いてあるけれども、その下手人が天皇だった

代実録』には、宮中のことだから、だれが手を下したかわ

が、いきなりなぐり殺されるという事件が起こった。『三

元慶七年（八八三）十一月、宮中で陽成天皇の乳母の子

いた。

三代後 544 禁衛軍 外人無知 212

あきらか 明（あきらか）

58才
57才
880年
887年
831

てて皇太子とし、……是の日、仁寿殿に於てお隠れになつた。

なお、『三代実録』の光孝天皇即位前紀に「天長八年（八三二）生」とあるのに、同じ『三代実録』の仁和三年（八八七）八月二十六日条には「天皇崩^{にやてんにみかひあがりましぬ}於仁壽殿^に。于^に時春秋五十八」とあって、一年のくいちがいがある。

この物語では、
光孝天皇は、天長八年（八三二）に生まれ、仁和三年（八八七）五十七歳の時に第七男源定省（後の宇多天皇）を皇太子とし、^よ是^この日に退位され、……その翌年五十八歳の時に崩御されたのである。うと考えたい。（後述）

参考迄に述べると、天皇の位につくことを辞退しようとする時康親王に、仁明天皇の第五皇子『本康親王』（深草少将として既述）が即位を勧めたといひ、こう記されている。

「本康親王は、仁明天皇の第五皇子。生年未詳。天長七年（八三〇）同九年（八三二）頃生まれか。延喜元年（九〇一）十二月十四日没。七十歳以上。元慶八年（八八四）陽成天皇の退位に際し、固辞する異母兄時康親王（光孝天皇）

152

5494P

光孝天皇の淡い想ひ
光孝天皇（時康親王）は、仁明天皇の第三皇子として、天長八年（八三二）にお生まれになった。母は女御（贈皇太后）藤原朝臣澤子である。（続日本後紀）仁明天皇の承和六年六月三十日条。「三代実録」光孝天皇即位前紀参照）
「三代実録」光孝天皇即位前紀には、光孝天皇の「為人」について、こう記されている。
閑雅（みやびやか）。謙恭和潤。慈仁（なさけぶかい）寛曠。親愛九族。性多風流。

光孝天皇（時康親王）は、仁明天皇の第三皇子として、天長八年（八三二）にお生まれになった。母は女御（贈皇太后）藤原朝臣澤子である。（続日本後紀）仁明天皇の承和六年六月三十日条。「三代実録」光孝天皇即位前紀参照）

光孝天皇の淡い想ひ
光孝天皇（時康親王）は、仁明天皇の第三皇子として、天長八年（八三二）にお生まれになった。母は女御（贈皇太后）藤原朝臣澤子である。（続日本後紀）仁明天皇の承和六年六月三十日条。「三代実録」光孝天皇即位前紀参照）
「三代実録」光孝天皇即位前紀には、光孝天皇の「為人」について、こう記されている。
閑雅（みやびやか）。謙恭和潤。慈仁（なさけぶかい）寛曠。親愛九族。性多風流。

同年本の
可能かな
ある。

884
816
68
とある。

69
-44
25
5406825
年々差は25
5406825

5492
710
5492
710

884 44
-841 1
43 43

53

元慶八年（八八四）二月二十三日に大極殿で即位された。光孝天皇は五十四歳の時に、小町は四十四歳だったように思われる。通昭は六十九歳であった。

同年九月九日の重陽の節に、光孝天皇は紫宸殿に御して、群臣に宴を賜わった。また特に文人を喚して、詩賦を作らせた。

その翌日の九月十日、權僧正遍昭が奏言して、

「雲林院は、常康親王（仁明帝の第七皇子）の旧居でした。

云々」

と言った。

あるいはこの時、……光孝天皇と遍昭との間に、昨日の『文人達の招喚』のことが話題にのぼったのかも知れない。

文人達が作った詩賦をあれこれ批評していたそんな折、

遍昭は、大いに慨嘆し、

「それにしても残念なことがあります。それは、小野小町を召して和歌等を作らせにならないのです」

と述べ、——小町とのかつての贈答歌のことも、

話したように想像される。第44回 僧正遍昭に侍る絶世の美女に向かって口ずさみになられた。

これ以後、光孝天皇は、種々の行事の度毎に、小町の様へまあ、……

子をそれとなく興味をもってご覧になったのではあるまい。その歌を聞いた小町は、帝が手にしておいでの觴（盃）

十月一日、光孝天皇は紫宸殿に御して、侍臣に宴をお賜わりになった。音楽が奏され、琴が弾かれ、歌がうたわれた。……晩になって禄が賜与された。出来、不出来によつてであろうか、各々差が有った。

十月八日にも、宴がもつられた。

そして、光孝天皇踐祚之年、元慶八年（八八四）の十一月二十一日には、大嘗祭が大々的にとりおこなわれた。

翌二十三日の夜、光孝天皇は豊樂殿後房にお留まりになり、琴歌神宴の歓楽が夜を徹して催された。

更に二十四日の夜にも、昨夜同様の儀が繰り返された。二十五日には、田舞・久米舞・吉志舞・倭舞があり、夜

になつてから宮人達の五節舞が舞われた。（三代実録）舞姫たちが、優雅に軽やかに、美しい舞いを舞い続けて

いた。

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよをとめの姿しはしとどめむ

光孝天皇は、遍昭が詠んだ『天女』の歌を、……目の前

5,495P

5,496^P

・カラーで印刷して
下さい。

・右頁の上半分に
配置したい。
大きくはみ出して

④5474^P

井上遍昭



第544図 僧正遍昭 (佐竹本三十六歌仙繪)

『日本繪巻物全集』三十六歌仙繪、角川書店、昭和42年12月30日発行、25頁参照、
154

に酌する白い嫺やかな手を宙に留めたまま、しばし忘我の境地をさまよっていた。

だがやがて小町は、にっこりと微笑んで会釈し、この歌をた。

天つかぜ雲ふきはらく
久堅の月のかくる道まどはなむ
もしかしたら、こうしたとき**四**——光孝天皇の小町への恋心が芽生えたのではなからうか。

小町、『雨乞の和歌』をよむ

年が改まって、仁和元年（八八五）の春を迎えた。

光孝天皇は、正月一日に大極殿に御して、朝賀をお受けになった。

また光孝天皇は、七日に紫宸殿に御して、青馬をご覧になり、宴を群臣に賜わりになった。……しかし、十一日には紫宸殿に出御されなかった。（二代実録）

光孝天皇の小町への思いはのっていくばかりだったのであらう。

尚、これ以後、「天皇不御」等の記事が目立つようになる。

なるほど、幼少の頃から読書が好きな方であって、頑強

でなかった一面もあったらうが、……この物語では、小町に起因する「天皇不御」の記事も多々あるのだらうと解したい。

■正月十六日条に、
「従五位上行散位頭小野朝臣國梁爲_ス上総介_ト」

とある。（以下、「三代実録」参照）
この記事が、光孝朝に多数散見される『小野朝臣』任官記録の最初のものである。

あるいはこの記事は、この頃すでに、光孝天皇の小町への思い入れが深くなってきたことを示すものなのかも知れない。

■正月二十一日条に、
「文人預_ル席_ニ者五人賦_ス詩_ヲ」

とある。
■二月十二日に、權僧正遍昭が上表してこう言ったという。
「……小僧初_テ剃_ハ髮_ニ之_ヲ曰_{ハク}。心_ニ誓_テ自_ラ謂_フ。鏝_ヲ跡_ヲ俗間_ニ。」

終_ハ命_ヲ山窟_ニ。云々」
そしてこれより、遍昭についての記事が続出するが、以降、省_ズとしたい。

■四月二十七日条に、
「従五位下小野朝臣千邦爲_ス玄蕃頭_ト」

次頁54頁

とある。この年（仁和元年）の小野朝臣の任官記事は、以

上の二件にとどまる。

まだ、光孝天皇と小町との恋は、燃え上がるほどにまで

は至っていないのであろう。

■五月一日から、半月間ほど、長雨が続いた。

そこで、大和国吉野の山奥の丹生川上神社へ、大中臣朝

臣夏名らを遣わし、止雨を祈願することになった。

尚、丹生川上神社（官幣大社）の由緒にこういう。

「祭神は、高麗神（上社）、罔象女神（中社）、閼竈神（下

社）の三神で、共に水に因縁深い神である。

往昔此神教して、『人声の聞えぬ深山吉野丹生川上に我が

宮柱を建て齋き奉らば、甘雨を降らして、霖雨を止めむ』

とのたまひければ、此處に社殿を営みて祀りしを創めとす。

時に天武天皇白鳳四年なりと云ふ。――（中略）――爾来、

雨乞には黒馬を献じ、止雨には白馬を献ずる例となりたり」

（「日本社寺大観」名著刊行会〈丹生川上神社〉参照）

大宮人達は、長雨が止むように祈願する為、白馬を引き

つれ、吉野の丹生川上神社へと向かった。

それでは、雨乞・止雨の祭りは、丹生川上神社の三つの

①「上社」……吉野川上流の吉野郡川上村

5,498^P

②「中社」……吉野川支流御手渕川（高見川）の畔に位置

する吉野郡小川村

③「下社」……吉野川支流である丹生川を溯ったところ、

吉野郡丹生村

のうち、どの社で行なわれたのだろうか。

丹生川上神社の由緒に、前述のとおり、

「人声の聞えぬ深山吉野丹生川上に我宮柱を建て齋き奉ら

ば、甘雨を降らして、霖雨を止めむ」

と記されているのだから、

〈雨乞・止雨の祈願祭は、吉野川支流の丹生川を溯った所

にある『丹生川上神社下社』の境内において、**敵かにとり**

行なわれた〉

ということがわかる。

念のために確認したところ、

・往古においては、丹生川上神社の「下社」で雨乞・止雨

の祭りを行なっていた。

・「上社」および「中社」（もと仏教寺院）は、後代に建

てられた、

という。（平成十四年二月十八日、丹生川上神社下社の神職者

談）

この折の『止雨の祭』について、……『三代実録』仁和

厳粛

下末537
次頁54頁
おごりかた

小町の声は、天上の国の神々の耳にも聞えて、……たちまち待望の雨が降ったのだらう。

この当時、雨乞といふ事は、甚だ重大な儀式であつた。雨乞には、名僧知識を集め、有らん限りの御祈禱をしたもの

この大切な重い国務が、一人の女性、小野小町に命ぜられたのは、実に異数（つねならぬためし、めったにないこと）

（照）しかも小町は、その重大な国務を天皇に代わって遂行し、

雨が降って大地が潤ったことを大いにお喜びになった、と拝察される。

八月六日。明経博士等が参内したが、光孝天皇は引見せ

八月十五日。神泉苑しんせんえんに行幸ぎょうこうされた。文人達ぶんじんたちが喚めされて、詩賦しふを作った。その席せきに預あづかった者は三十三人であった。

そして、思い浮かんだ詩賦^{しふ}を書き留め^{かきとど}、添削^{てんき}し、さらに推敲^{すいこう}をつづけるそんな文人^{ぶんじん}たちのなかに、小野小町の姿も

ている。
花の時を待ちては玉筆ぎよくひつをとりて紅桜こうおう紫藤しどうの和歌わかを詠えいし、

手に鸚鵡おうむの觴さかづきを取れば漢月かんげつ（天あまの川がわと明月めいげつ）落ちて影静かげしずかなり。

且は幸地噲上詠の賦に效ふ。
韻を古調に造りて、詩を新章に賦せんと云ふこと爾なり。

とある。(第九十五章〈光孝天皇の寵愛〉の項において詳述し
たい)

② ~~それ~~ ^{だから} ~~して~~ ^に 和歌だけでなく詩賦をも巧みに作ったのだから。次のように謡われてい

にて。花の貌輝き。桂の黛青うして。白粉を絶やさず。
羅綾（うすぎぬとあやおり）の衣多うして。桂殿（けいでん）（立派な御

鰯は。漢月^{かんげつ}袖^{そで}に静かなり。云々」

もしかしたら、
二聖川田に、ひそやかにそっと
〈小町が作った詩が、何らかの詩集に、ひそやかにそっと〉

掲載けうがいされているのではなかろうか？
 とも思われるが、……しかし今、それを指摘してきすることは出

来ない。

③まだ、『古今和歌集』^{まなじよ}真名序の冒頭^{むづかし}に、こう記されてい

る。

「和歌に六義あり。一に曰く、風（政治などを遠まわしに

風刺した詩)。一に曰く、賦（比喩などを用いない直叙の詩）。三に曰く、五々」

なにとある。「古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、四
一三頁参照）

八月十五日じゅうごにちの十五夜に、小野小町おののこまちも招かれて、詩賦や和歌（賦）を作ったのだらう。

と想察される。

心盡こころづくしの秋あきはきにけり
(群書類従本「小町集」。「古今集」巻第四一八四)

十五夜の月の光が木のまよりもれていて、そんな中を帝（みかど）の影が、だんだん近づいてくる。

心懸しの (ちまごまに物思ひをする) 秋がやってきたから、
いんぱにも物思ひするのでもいいか。

小町は、かつて考えてみたことさえない仕合しあひわせを感じ
 じる一方で、~~いかに~~^{いかに}＜帝をお慕たづないしていいものだろうか＞と

躊躇^{ちゅうちゅう}し、あれこれ様^{よう}様な物思^{ものおも}いにふけり、気がもめてしかたがなかったのである。

なお、「月影」は、月のひかり、月の姿、月の光に映し出されたものの姿、等の種々の意味で用いられるという。

（「広辞苑」〈月影〉参照）
 日が暮れて、どれくらい後のことだったろうか、……

文人らは、鸞輿(天子の輿)が還って行くのをお見送りした。

『三代実録』仁和元年八月十五日癸の末尾に、

「日暮、鸞輿還宮」

とある。

■九月九日の重陽の節の折にも、文人達は招喚されて詩賦を作った。

■十月一日には宴がもうけられ、和歌が作られた。

■十月二十二日に、遍昭は『僧正』となった。

■十二月十八日、光孝天皇は、今年七十歳(古希)になつた僧正遍昭を慶賀された。(三代実録)

衣通姫の流なり

この当時の人々は、小野小町をどう見ていたのだろう

か。

平安朝初期の六人の和歌の名人、即ち『六歌仙』は、僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大友黒主(大友皇子の曾孫。大友与多王の孫)

(ことである。(古今集」仮名序・真名序。「広辞苑」六歌仙」等参照)

六歌仙の中のただ一人の女性として『小野小町』を選んだ紀貫之は、『古今集』仮名序において、

5,502 P

5632 E 164P

小野小町は、古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず、いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。つよからぬは女の歌なればなるべし。

と評した。

また、紀淑望が書いたといわれる漢文の『古今集』真名序には、

小野小町之歌。古衣通姫之流也。然艶而無二氣力。如三病婦之着二花粉。

「小野小町の歌は、古の衣通姫の流なれども、然も、艶にして氣力なし。病婦の花粉を着けたるがごとし」

とある。(古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、一四、五九、四一七頁。「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、三二一頁参照)

*

それでは、『衣通姫』とは、一体、どのような女性を指しているのであらうか。

『衣通姫』にまつわる伝承は、日本書紀と古事記の両方にあり、かつ異同(違い)もあって、——『衣通姫』と呼ばれた女性が、幾人かいたことがうかがえる。(小野小町歌

小林茂美、桜楓社、三三九頁参照)

■『日本書紀』では、允恭天皇の皇后忍坂大中姫(稚野毛

一派皇子の娘で、木梨輕皇子・安康天皇・輕大娘 皇女・雄

略天皇らの母。第1表参照)の言葉として、

「妾が弟(妹)、名は弟姫とまうしたまふ。弟姫、容姿絶

妙れて比無し。其の艶しき色、衣より徹りて晃れり。是を

以て、時人、號けて、衣通郎姫と曰す」

と述べている。(允恭紀七年十二月一日条)

つまり、允恭天皇の皇后の妹「弟姫」が、『衣通郎姫』

と呼ばれた、という。

■一方、『古事記』では、允恭天皇とその皇后忍坂大中津

比売との間に生まれた皇女輕大郎女について、

「亦の名は、衣通郎女」

と述べ、その名の由来を、

「御名を衣通の王と負せるゆゑ(お呼びする理由)は、其

の身の光、衣より通り出づればぞ」

と注記している。

つまり、允恭天皇と皇后との娘「輕大郎女」が、『衣通

郎女』と呼ばれた、という。

*

といったことから推しはかると、我が国の古代にお

いては、容姿絶妙な艶しい女性を讃称して、『衣通郎姫』

とか『衣通郎女』という亦の名で呼んでいたように思われ

5,503 P

161

る。

それはさながら、……現代の我々が、美しい女性のこと

を親しみを込めて、『小野小町』と呼ぶのと全く同じよう

な感覚であったかも知れない。

すなわち、小野小町以後、美しい人が『小野小町』の愛

称で呼ばれることが多いのと同様に、——小野小町の時代

迄は、透き通るように美しい人は、『衣通郎姫』・『衣通郎

女』といった愛称で呼ばれ、絶讃されていたのであろう。

恐らく、母『衣通姫』の血を受けた小町は、艶しい色が

衣より晃り徹るばかりの美人だったに違いない。

そこで歌人である紀貫之は、美しい衣通姫を母にもつ小

町が、そんなにまでも美しいことを言い表わすために、詩

的に、

「小野小町は、古の衣通姫(＝美人)の流(末裔)なり」

「小野小町は、美人系の血筋をひいている」

と評したように思われる。

たしかに、『古今集』に「古の衣通姫の流なり」と記さ

れてはいるが、——しかし、だからといって、特に允恭天

皇の皇后の妹、あるいは允恭天皇の娘との関連性を考える

必要はあるまい。

尚、これから述べるように、光孝天皇と小野小町との間

小野小町 2694-図

に親密きわまりない関係があったからこそ、……皇室に遠慮することなく、勅撰和歌集である『古今集』において、

いわば公然と、

「小野小町は、古の衣通姫の流なり」

と評し得たようにも思われる。

竹取物語

全くもって定かならないことながらあえて述べ

〈あるいはもしかしたら小野小町は、丁度このころ、ほん

のなごさみに『竹取物語』を書き綴ったのかも知れない〉

などと想像される。

漢籍や仏典にかなりの教養を持ち、和歌の才能をも有し

た人物が、『竹取物語』の作者として推察される、という。

〔竹取物語・伊勢物語・大和物語〕日本古典文学大系、岩波書

店、六頁参照

竹取物語は、平安初期に成立した日本最古の物語である。

推定説には、弘仁二年（八一）以後、延喜元年（九〇一）

以前とするものがあり、それ以降とする説もあって多種多

様である。

作者未詳。昔から源順（九二一〜九八三）説が唱えら

5,504 P

れ、他に源融（八二一〜八九五）説や遍昭（八一六〜八九〇）説などがある。（『世界大百科事典』平凡社〈竹取物語〉〈源

順〉。他参照）

竹取物語の内容については、広くよく知られている。

「竹取の翁が竹の中から得て育てた美女かぐや姫は、五人

の貴公子の熱心な求婚を難題を出してしりぞけ、時の帝の

招聘にも応ぜず、遂に八月十五夜、月の世界へ帰る」

という筋書きである。（『広辞苑』〈竹取物語〉参照）

多々差違はあるものの、……どことなく、小野小町の境

涯と似た物語であるように感じられる。

〔天上の国に比して考えられる大倭国（肥後国）で生まれ、

猶子（養子）として引き取られ、祖父篁（竹・ぶの意）に

よって育てられた絶世の美女小野小町は、熱心な求婚を難

題を出してしりぞけ、時の帝（光孝天皇）からの招聘にも

未だ応じかねていたのだらう〕

と想察される。

小野小町は、このようなこれまでの自分自身の半生を基

にして、情緒豊かな『竹取物語』を書き上げたのではなか

らうか。

• なお、『竹取物語』は、古くは『竹取の翁の物語』・『か

ぐや姫の物語』ともよばれたという。（『世界大百科事典』

5396 是 257
44X31

平凡社〈竹取物語〉参照)

●また、『竹取物語』は、源氏物語(総合)に「物語の出で来はじめの祖」と記されているように、十世紀後半以後に作られることになる物語文学の先駆的作品となつたのだった。(史料による日本の歩み「古代編、吉川弘文館三三五頁。「竹取物語・伊勢物語・大和物語」日本古典文学大系、岩波書店、五頁参照)

光孝天皇の寵愛

新たな年、光孝天皇の仁和二年(八八六)の春を迎えた。嬉しい、心ときめく春であった。時に、光孝天皇は五十六歳、小町は四十六歳であつたるうか。

●『三代実録』仁和二年正月十六日条に、

①「散位従五位下小野朝臣千里爲^ナ山城介」

②「散位従五位下小野朝臣宮岑爲^ス周防守」

とあり、この記事が、仁和二年から三年にかけて多数見られる「小野朝臣」任官記録の端緒をなすものである。

●『三代実録』仁和二年及び三年条に見られる「小野朝臣」任官記事の回数を数えると、

●仁和二年に、七回(四名)

たの(親・祖)
おの(親・祖)
は「物語のい」で「
竹取の(後)」
とある

●仁和三年に、五回(四名)

もあつて、……それ以前と較べると、小野氏一族が際立つて幅広く引き立てられている、といえよう。

●『三代実録』清和・陽成・光孝朝の記録中に見られる「小野朝臣」任官記事の【掲載回数】を示す一覧表を掲げてみよう。

●この表で特に目を引くのは、——光孝天皇の仁和二年から三年にかけて、小野氏一族の任官記事が頻出するべし

この物語では、

《仁和二年の春頃から、翌三年八月の退位迄の間、光孝天皇は、愛する小町の爲に、……その一族に恩恵を及ぼされ

た》

と考えてみたい。(第九十五章〈光孝天皇の淡い想い〉の項、光孝天皇の「為人」(慈仁寛曠。親「愛」九族)参照)

うにまかせない時代であつた。だから、小野朝臣を重要な官職にいきなり拔擢するとい

うわけにはいかなかつたであらう。

しかしそれでも、光孝天皇は、小野氏一族の多くを引き立ててやらすにはおれない気持でおいでだったのだらう、